文部科学省 平成 24 年度「大学間連携共同教育推進事業」選定取組

彩の国 連携力育成プロジェクト ニュースレター

第4号
2014年3月27日発行
［発行］埼玉県立大学／埼玉医科大学／城西大学／日本工業大学

【お問い合わせ先】埼玉県立大学事務局･企画担当　☎ 048-973-4715／✉ kikaku@spu.ac.jp

活動報告会＆特別講演会
「ケアにおけるつながる力を育むために」を開催

３月７日（金）、彩の国連携力育成プロジェクト活動報告会＆特別講演会を開催しました。活動報告では、この１年半の教育・研修活動や学生による自主学習の取り組みの進捗を報告。特別講演会では、訪問看護や「暮らしの保健室」などを実践している秋山正子先生を招き、今後の地域包括ケアの方向性と「つながる力」の実際についてご講演いただきました。

1年半の成果を4大学教員･学生が発表

彩の国連携力育成プロジェクトでは、平成24年のスタート以来、IPW 実習試行、研修会やワークショップ、海外大学との WEB による IPE 交流など、数多くの事業を実施してまいりました。次年度がプロジェクトの中間年度となることなどから、このたび、地域の専門職の方々や住民の皆様に向けて活動報告会を実施しました。当日、会場となったさいたま市民会館うらわには、４大学の教職員、学生に加え、埼玉県内の看護師、薬剤師などの専門職の方々をはじめ、約160人の方にご参加をいただきました。

学生主体の学習企画の発表では､実際に企画を運営した学生が発表しました。

様々な図や映像とともに､在宅医療や地域包括ケアの取り組みを教えていただきました。

特別講演会
『ケアにおける「つながる力」を育むために ～訪問看護･暮らしの保健室の実践から～』

報告会に続けて､白十字訪問看護ステーション統括所長であり､『暮らしの保健室』室長も務めていらっしゃる秋山正子先生による特別講演会を行いました。この講演会は、先駆的な在宅医療や地域包括ケアの取り組みを行っている秋山先生から、実践の現状を学ぶことを通じて教育の方向性を確認するためのもので、講演を通して、実践を行う専門職を養成するためにはどのような教育内容や教育方法が求められるのかについて示唆を得ました。

報告会＆特別講演会を終えて…

埼玉県立大学 **新井 利民** 講師（プロジェクト サブリーダー）

本人・家族の意向を中心とし、「住まい」や「生活支援・福祉サービス」を基盤に､「医療･看護」「介護･リハビリ」「保健・予防」の各サービスを結び付けていく今後の地域包括ケアの方向性は、私たちのプロジェクトの方向性と合致していることを再確認しました。一方、秋山先生が実践しているような、既存の制度の枠組みやつながりに囚われず、地域社会の「開発」を行うための基礎的な力を、学生にどのように育んでもらえれば良いのか、宿題を与えられた思いがしました。今後も地域の実践に学びながら、教育プログラムの開発・改善を行ってまいります。

日本工業大学学生が『ヒューマンケア体験実習』に参加

2月26日、介護老人保健施設プルミエール（松伏町）にて、日本工業大学の学生が『ヒューマンケア体験実習』に参加しました。この実習は、埼玉県立大学において1年生後期に行われるもので、援助を必要とする人々の“生活のありよう”“思い”等を理解し、その人の立場で考える態度を養うことを重視しています。

施設設備や地域のボランティアの方の活動を見学したり、多くの利用者さんと会話したりする中で、コミュニケーションの大切さ、利用者さんの思いを学ぶ機会をいただきました。

2月28日には日本工業大学において振り返りのためのディスカッション、および報告会が行われ、施設設備の工夫や、外部空間と周辺地域との関わりへの気づきなど、建築を学ぶ学生ならではの発表がなされました。

昔の生活や環境の様子など、様々なお話を聞かせて頂きました。
利用者の方とのお話しを通じて、笑顔や目線の高さなど、コミュニケーションをするうえで大切なことを学びました。

振り返りで共有した学びを発表しました。
チームメンバーを尊重しつつ対話することで、お互いに経験への理解を深め合う機会となりました。

実習を終えた学生に向けて

介護老人保健施設　プルミエール
介護福祉士　**古泉直子** さん

先日は当施設にお越し頂きありがとうございました。皆さんにとっては初めての環境で、戸惑われたこともあった事と思います。

今回を振り返って改めて感じたのは、『業種に関係なくコミュニケーションが大切である』ということです。利用者の多様化するニーズを“単なるわがまま”ではなく、『こだわり』や『その人らしさ』と捉えることで、過ごしやすい生活空間を提供できるのだと思います。ニーズに全て応えられない時もありますが、コミュニケーションを重ねる事でお互いに相手の気持ちが理解出来、さらに、利用者の素敵な笑顔に逢えるのだと思います。

建物の構造にも、人の行動や気持ちにも必ず理由があります。自分の考えを持つことは大切なことですが、それを一方的に押し付けるのではなく、相手の事を思いやる気持ちを大切にしていって下さい。

皆さんの夢が実現し、たくさんの方に喜んで頂けるプロフェッショナルとしてご活躍されることを切に願っております。

interview

「連携を語る」

埼玉医科大学　医学部医学科　3年
神山 雄基 さん

埼玉医科大学入学前、受験生だった頃から専門職連携教育に興味を持っていたという神山さん。学業、課外活動などに積極的に取り組みながら、これまでに2度行われたIPW 実習の試行事業の両方に参加しています。

「2回目の時の利用者さんの病気は、まだ授業でやっていなかったので、わからないなりに調べました。医学生がわからないことは、他の学部の人はもっとわからない。他の学部の人との知識の差を埋めて一緒にやっていくために、どういう風に努力すればいいのか。これから勉強しなきゃいけないなと思いました」

IPW 実習に参加するのは、保健医療福祉分野の学生ばかりではありません。分野外の人たちに医学を分かりやすく説明することは、医師の専門性、得意分野だと語る神山さん。こうした“専門性”を意識するとともに、実習中には“普通に生活している人としてどう考えるか”ということにも注意を払っていたのだそうです。

「利用者さんとの距離感も大事だけれど、チーム内での距離感も大事だなと思います」

社会の中で一緒に活動する中でも、職種の別はきちんとある。お互いを尊重するためにも、適度な距離感が必要―“チーム形成のための確かな実践的ノウハウ”が、IPW 実習の経験を通して語られました。